

西脇常記教授退休記念論集

東アジアの宗教と文化

編集 クリスティアン・ウイッテルン／石立善

序文

西脇常記先生から、時期を早めて京都大學の職をやめ、同志社大學で新たな活動を始めたいということを知り、聞いて聞いたのは、二〇〇五年の夏でした。そのことに私は驚きを禁じ得ませんでした。しかし、先生は、いつものように元氣一杯に、決然として、新しいところで新たに教育活動を始められること、また、雑業と制限も少ない状況の恵まれた環境で研究を再び始められることの素晴らしさを説明されました。その少し前から先生の教え子と友人との間で退職記念論文集のことが話題になつてはいましたが、この時突然早くもそれが現實のものとなる時期を迎えることになりました。

西脇常記先生は、一九四三年、後の職業生活で関心の中心となる中國の上海で生まれました。大學教育の初めの時期を東京教育大學で過ごした後、一九六八年に京都に移り、京都大學文學部の修士課程に入學されました。學生運動の時期に当たり、京都大學でも一時的に授業が中止されましたが、先生はその時間を巧みに使って、ドイツに二回、ミュンヘン大學（一九六九〜七〇）とテュービンゲン大學（一九七一〜七二）に遊學されました。そこでドイツにおける漢學を實感されただけではなく、ドイツの同級生で終生にわたる親友との出会いもできました。一九七五年に博士課程を單位取得退學され（後一九九九年に『唐代の思想と文化』で博士号を取得）、助手として文學部で採用されました。一九七九年に新潟大學教養部で助教授として赴任され、一九八一年に京都大

學に戻り、同じく教養部に勤められました。一九九二年に教養部は総合人間學部に改組され、一九九三年に教授に昇進され、二〇〇三年からは人間・環境學研究科で大學院教育を擔當されました。その間もドイツの漢學に興味を持ち続けられ、一九八九年にはハンブルグ大學の招きに應じて、客員教授として教壇に立たれました。この論文集に収録されたドイツの友人と仲間の論文の數とテーマの多様性は、この學術交流の豊かさや深さの明白な證據でもあります。

この「第三者の目線」、つまり東洋の外から漢字文化圏を見る時の見識に對する興味は、ドイツの漢學に止まらず、英語で書かれた研究成果を取り入れることにも大いに見られます。早くも一九七六年に、デ・ホロート氏の『中國宗教體系』という大作から、第二章を『中國の墓』として出版され、一九七八年には、エドワード・シエファアの『神女——唐代文學における龍女と雨女』を、一九九四年には、ジェイムズ・ワトソンとエヴリン・ロウスキ編の『中國の死の儀禮』を二人の學生と共に譯されました。

中國の原典の譯注についてもさらに分野の廣がりが見られます。一九八七年に狩野直禎先生とともに班固の『漢書郊祀志』を出版されましたが、それに續いて一九八九年と二〇〇二年に劉知幾(六六一〜七二一)の『史通』(内篇・外篇)について、譯文と注釋だけではなく、各段落に内容説明、原文、讀み下し、現代語譯と細かい注を付けて出版されました。長年の研究の成果として、今後多くの中國歴史學に關心を持つ研究者にとって不可欠な研究資料になることは間違いないと思います。

一九九〇年代にはまた學究的關心の新たな展開がみられます。それは、プロシア科學院によつて行われた、四回にわたるトルファン探險隊により、ベルリンに將來された寫本・初期印刷物などへの注目です。一九〇二年から一九一四年の間に行われた調査の將來物は、戰渦の混乱と戰後の東西分立で分散され、一部は行方不明になりました。ドイツの再統一後に、大部分(いわゆる「ベルリン・トルファン・コレクション」)がベルリンの國立

圖書館とプロシア科學院に保存されるようになり、閲覧が再び可能になりました。このコレクションには主に佛敎の文献が収録されていますが、一部の非佛典斷片も含まれています。この部分はそれまでほとんど注目されていませんでした。西脇先生はこうした斷片を中心に、目録化の作業とともに序文・跋文等の解讀を始められました。それは、文書の作成の歴史的な背景と、文書の物としての歴史に新しい光を當てる作業です。この研究の成果は、一九九七年の『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』と、二〇〇二年の『ドイツ將來のトルファン漢語文書』という二つの論文集にまとめられました。このほかにも先生はトルファン・コレクションの非佛典斷片の目録を二〇〇一年ドイツで出版されました。京都大學における最終講義のテーマ『佛母經』について（本論文集収録）は、ベルリンの文書に對する先生の繼續的な關心の證據となるものです。

西脇先生について語る時、多くの京都大學を訪問した留學生や訪問學者に對する御厚意について言及しなければなりません。どのような問題が生じてても、學究的な問題でも、日本での生活に困った事があつた時にも、研究テーマに近い學者を紹介していただくことも、家を貸していただくことも、日本滞在の期間が留學生や訪問學者にとって最もプラスとなる經驗になるように、先生が必ず最善の努力を盡くしてくれました。このことに對する感謝なくしては、先生に對するどのような感謝も、十分なものではありません。

Christian Wittern

京都、二〇〇七年夏